

小学校における学校支援ボランティアに関する研究 —アンケート調査からの考察—

木村祐介

(茨城県取手市立久賀小学校)

【要旨】

本稿の目的は、小学校における学校支援ボランティアの活動を有効にするために、学校支援ボランティア活動を行っている小学校に対して意識調査を行い、その内容を分析し、今後における有効な実践への手がかりを得ようとするものである。本研究では、平成 22 年度から学校支援ボランティア制度を開始した茨城県 J 市 A 小学校を調査対象とし、A 校に在籍する児童の保護者及び A 校に携わっている地域住民を対象に意識調査を行った。

分析の結果として、活動に参加した人の約 7 割が活動に満足していることが分かった。ボランティアを行う理由については、子どもが在籍していることが回答結果として多かった。ボランティア活動に満足している群と満足していない群に共通して見られた活動を行う際の問題点として、時間的な問題があるとの回答が多かった。

1. はじめに

社会が複雑に多様化し、子どもを取り巻く環境も大きく変化している現在、家庭や地域の教育力の低下が叫ばれ、学校は様々な課題を抱えながら、多岐にわたる役割を求められている。今後は、学校だけが役割と責任を負うのではなく、学校、家庭、地域の連携協力のもとで教育を進めていく必要がある。

こうした中で、学校支援ボランティアを導入することは、学校教育の充実や地域の教育力の向上などにつながると考えられる。

今回、調査で伺った茨城県 J 市にある A 小学校も、学校、家庭、地域が一体となって地域ぐるみで子どもを育てる体制を整えることを目標として、日々の教育活動に取り組んでいる。A 小学校の学校支援ボランティアの取り組みについては、平成 22 年度から「学校支援ボランティア」制度が開始されて、現在まで学校を活動の拠点、組織の中心としている。学校が運営を担い、ボランティア参加者との連絡調整などを行っている。

本調査においては、茨城県 J 市 A 小学校における学校支援ボランティアの実践者を今後増やしていくために、実際に A 小学校で学校支援ボランティアとして活動している参加者に調査を行い、A 小学校における学校支援ボランティアとしての活動の現状を把握するとともに、今後における A 小学校での学校支援ボランティアの課題や有効な取り組み等について検討していくものとする。

2. 研究方法

調査対象としては、茨城県 J 市 A 校に所属する児童の保護者および A 校に携わっている地域住民を対象に調査を行った。内訳としては、A 校児童の保護者 146 名、その他の地域

住民 32 名の計 178 名である。

調査方法は、無記名自記式質問紙を直接配布し、回収を行った。(配布 178 枚、有効回答数 145 枚、有効回答率約 81.4%)

調査内容としては、質問紙を用いて①「A 校での学校支援ボランティア活動を行った上での満足度について」②「学校支援ボランティアとして活動した分野について」③「A 校でのボランティアを行おうと考えた理由について」④「A 校でのボランティア活動を行うきっかけについて」⑤「A 校でのボランティアを行う際の問題点について」⑥「A 校でのボランティアを行って良かったと思うことについて」の以上 6 項目とした。回答方法についてはすべての設問で選択式とした。分析方法としては、上記のアンケート調査の結果を単純集計及びクロス集計して分析を行った。

3. 調査結果

アンケート調査の結果としては、以下のものである。

(1)A 校での学校支援ボランティアの満足度について

設問①「A 校での学校支援ボランティアの満足度について」の回答結果は以下の通りである(表 1)。

「満足している」が約 25%、「やや満足している」が約 46%、「あまり満足していない」が約 20%、「満足していない」が約 9%であった。

表 1 学校支援ボランティアの満足度について

(n=145)

項目	
満足している	36 (25%)
やや満足している	67 (46%)
あまり満足していない	29 (20%)
満足していない	13 (9%)

(2)A 校での学校支援ボランティアの活動分野について

設問②「A 校での学校支援ボランティアの活動分野について」の回答結果は以下の通りである(表 2)。

表 2 学校支援ボランティアの活動分野について

(複数回答あり n=145)

項目	
学校行事支援	109 (75%)
校内環境整備	92 (63%)
登下校の安全確保	65 (45%)
学習支援活動	35 (24%)

運動会や持久走大会の手伝い、収穫祭の手伝いなどの「学校行事支援」が約 75%と最も多かった。次いで、学校周りや校庭の草取り、プール清掃などの「校内環境整備」が約 63%、

児童の登下校時の際の通学路での見守りといった「登下校の安全確保」が約 45%、校外学習の付き添いや教科の指導補助などの「学習支援活動」が約 24%であった。

(3) A 校でのボランティアを行おうと考えた理由について

設問③「A 校でのボランティアを行おうと考えた理由について」は、以下の通りである(表 3)。質問の内容から、児童の保護者を除いた地域住民のみの回答結果についても表記した(表 4)。

表 3 ボランティアを行おうと考えた理由について

(複数回答あり n=145)

項目	
子どもが在籍しているから	109 (75%)
学校への協力がしたい	89 (61%)
特技を生かしたい	42 (29%)
地域社会のため	28 (19%)

全体の結果としては、A 校に子どもが在籍しているからボランティアに参加しているという「子どもが在籍しているから」の回答が約 75%と最も多かった。次いで「学校への協力がしたい」が約 61%、自分の持っている特技を学校の中で生かしたいという「特技を生かしたい」が約 29%、自分が住んでいる地域社会に貢献したいという「地域社会のため」が約 19%であった。

表 4 ボランティアを行おうと考えた理由について (保護者を除く地域住民)

(複数回答あり n=32)

項目	
学校への協力がしたい	25 (78%)
特技を生かしたい	19 (59%)
地域社会のため	13 (40%)

児童の保護者を除いた地域住民のみの回答結果については、「学校への協力がしたい」が約 78%と最も多かった。次いで、自分の持っている特技を学校の中で生かしたいという「特技を生かしたい」が約 59%、自分が住んでいる地域社会に貢献したいという「地域社会のため」が約 40%であった。

(4) A 校でのボランティア活動を行うきっかけについて

設問④「A 校でのボランティア活動を行うきっかけについて」の回答結果は次の通りである(表 5)。

学校から、ボランティアの募集の知らせを手紙等で児童を通じて家庭へ配布したり、地域の掲示版や回覧板を利用してボランティアの募集を知らせる「学校からの手紙等の知らせ」が約 77%と最も多かった。次いで、学校からボランティアを依頼したい人への電話等を用いた直接的な連絡による「学校からの直接的な呼びかけ」が約 48%、ボランティア経験者からの誘いや、知り合いからの誘いといった「仲間からの誘い」が約 37%であった。

表5 ボランティア活動を行うきっかけについて

(複数回答あり n=145)

項目	
学校からの手紙等の知らせ	112 (77%)
学校からの直接的な呼びかけ	69 (48%)
仲間からの誘い	54 (37%)

(5) A校でのボランティアを行う際の問題点について

次に、設問⑤「A校でのボランティアを行う際の問題点について」である。この設問については、設問①「A校での学校支援ボランティアの満足度について」の回答結果とクロスさせた(図1)。

まず、設問①で「満足している」「やや満足している」と回答した群の結果は次の通りである(表6)。

表6 ボランティアを行う際の問題点について

(設問①で「満足している」「やや満足している」と回答した群)

(複数回答あり n=103)

項目	
時間的に参加する余裕がない	79 (77%)
一緒に活動する仲間がいない	58 (56%)
自分のやりたい活動内容がない	46 (45%)
何をしてよいか分からない	31 (30%)
人間関係が煩わしい	17 (17%)
自分にできるとは思わない	9 (9%)
参加する必要性を感じない	6 (6%)
特にない	2 (2%)

ボランティア活動に参加する時間を作ることが仕事等の都合があり難しいといった「時間的に参加する余裕がない」との回答が約77%と最も多かった。次いで、「一緒に活動する仲間がいない」との回答が約56%、「自分のやりたいボランティア活動の内容がない」との回答が約45%、「ボランティア活動に参加した際に、何をしてよいか分からない」との回答が約30%、「人間関係が煩わしい」が約17%、「自分にできるとは思わない」が約9%、「参加する必要性を感じない」が約6%、「特にない」が約2%であった。

次に、設問①で「満足していない」「あまり満足していない」と回答した群の結果は次の通りである(表7)。

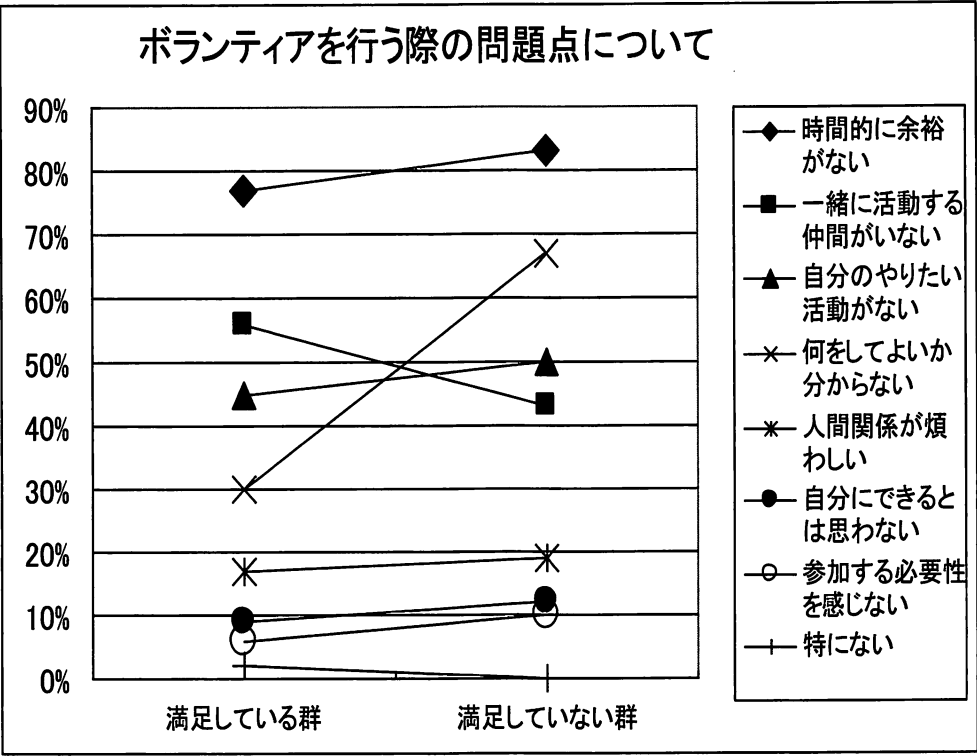
ボランティア活動に参加する時間が都合があり作ることが難しいといった「時間的に参加する余裕がない」との回答が約83%と最も多かった。次いで、「ボランティア活動に参加した際に、何をしてよいか分からない」との回答が約67%、「自分のやりたいボランティア活動の内容がない」との回答が約50%、「一緒に活動する仲間がいない」との回答が約43%、「人間関係が煩わしい」が約19%、「自分にできるとは思わない」が約12%、「参加する

必要性を感じない」が約 10%であった。

表 7 ボランティアを行う際の問題点について
(質問①で「満足していない」「あまり満足していない」と回答した群)
(複数回答あり n=42)

項目	
時間的に余裕がない	35 (83%)
何をしてよいか分からない	28 (67%)
自分のやりたい活動がない	21 (50%)
一緒に活動する仲間がいない	18 (43%)
人間関係が煩わしい	8 (19%)
自分にできとは思わない	5 (12%)
必要性を感じない	4 (10%)
特にな	0 (0%)

図 1 ボランティアを行う際の問題点について
(設問①「A 校での学校支援ボランティアの満足度について」×設問⑤「A 校でのボランティアを行う際の問題点について」)



(6) A 校でのボランティアを行って良かったと思うことについて
設問⑥「A 校でのボランティアを行って良かったと思うことについて」の回答結果は以

下の通りである(表 8)。

表 8 ボランティアを行って良かったと思うこと

(複数回答あり n=145)

項目	
感謝され喜びを感じた	98 (68%)
学校へのイメージが変わった	74 (51%)
やりがいがある	71 (49%)
新しい体験ができた	64 (44%)
知り合いが増えた	42 (29%)
特にない	19 (13%)

児童や教職員から感謝されて喜びを感じたことがあるといった「感謝され喜びを感じた」の回答が約 68%と最も多く、次いでボランティアを行う前と後での学校に対する考えが変わったという「学校へのイメージが変わった」の回答が約 51%、学校支援ボランティアを行うことでやりがいを感じられたという「やりがいがある」の回答が約 49%、ボランティア活動を通じて今まで経験したことがないことが経験できたという「新しい体験ができた」という回答が約 44%、ボランティア活動に参加することで知り合いが増えたという回答が約 29%、「特にない」という回答は約 13%であった。

4. 考察

今回の調査結果では、次のようなことが伺える。

まず、設問①の結果から、A 校での学校支援ボランティアの活動に参加した人の約 7 割がその活動に満足し、約 3 割が満足していないことが分かった。ボランティア活動に参加したことがある者の大半は活動に満足しているということが伺える。

設問②の結果から、ボランティアの活動分野としては、学校行事支援が 7 割以上と最も高く、次いで校内環境整備が約 6 割、登下校の安全確保も約半数近くであることから、活動の分野としては幅広い活動内容で参加してくれていることが伺える。しかしながら、学習支援活動については約 2 割を超える程度と、他の活動分野と比べると高い値ではない。他の活動分野と比べて低い理由を今後知る必要があると思われる。

設問③の結果では、ボランティアを行おうと考えた理由としては、子どもが在籍しているからという理由が約 7 割 5 分と最も高かった。これは、子どもが小学校に在籍しなくなった場合には、小学校でボランティアとして活動することがなくなるといったことにも繋がる可能性があると思われる。小学校を卒業した児童の保護者が、児童が在籍していた時期だけのボランティア活動の参加ではなく、卒業後も地域住民として学校にボランティアとして継続して活動する意思があるかを知ることでもある。その他として、地域住民のみの理由を見てみると、学校への協力をしたいと考えている人が約 8 割と多く、学校に対して協力的であることが伺える。また、約 6 割がボランティア活動の場で特技を生かしたいと思っていることから、活動内容で特技を生かせるように工夫をしていくことで、よりボランティアへの参加を促せるのではないかとと思われる。

設問④の結果から、ボランティア活動を行うきっかけとしては、学校からの手紙等の知

らせを見たことが約 8 割近い回答であった。このことから、手紙等の文書を使った呼びかけはボランティアの参加を促す上で効果的であると考えられる。また、学校からボランティアを依頼したい人への電話等を用いた直接的な連絡によることがきっかけとの回答も約 5 割、ボランティア経験者や知り合いからの誘いによることがきっかけとの回答も約 4 割近くと、直接的な声掛けもある程度有効であると考えられる。

次に、ボランティアを行う際の問題点について考察していきたい。

設問⑤の結果から、ボランティア活動に満足している群と満足していない群に共通して見られた回答結果として、「時間的に余裕がない」といった時間的な問題が約 8 割前後とかなり高かった。現在は、仕事に就いている保護者が多いので、小学校の平日における授業時間内にボランティアとして活動することは難しいと思われる。これは、休日に行われることの多い学校行事や校内環境整備、平日に行われる学習支援といった、設問②に見られた回答結果と関係する可能性があるのではないと思われる。その他の結果については、「一緒に活動する仲間がいない」といったことも約 5 割前後となっている。ボランティア活動を行うにあたっては、一緒に参加できる仲間の存在が大きいのかと考えられる。満足していない群のみで見ると、「自分のやりたい活動がない」「何をしてもいいかわからない」が半数以上と高い値である。これらについては、活動に興味を持てるような内容の選定や、参加した際の活動内容に戸惑わないように学校側、教職員との事前指導や打合せを行っていくことで、対応していけるのではないと思われる。特に、「何をしてもいいかわからない」の回答については、満足している群と満足していない群では、37 ポイントの差がある。このことから、ボランティア活動を行っていく上で活動内容に戸惑いがある場合は、否定的な影響を与える可能性があると思われる。

最後に、設問⑥の結果から、学校支援ボランティアを行って良かったと思うことについては、児童や教職員から感謝されて喜びを感じたことがあるといった回答が約 7 割と最も多い。その他として、やりがいを感じられるといった回答が約 5 割、ボランティア活動を通じて新しい体験ができたという回答が約 4 割、知り合いが増えたという回答が約 3 割となっている。これらから、学校支援ボランティアに参加したことで肯定的な意見に繋がる可能性があることが伺える。また、ボランティアを行う前と後での学校に対する考えが変わったという回答も約 5 割となっていることから、学校にとっても保護者や地域住民に学校の様子を知ってもらい良い機会となっていることが伺える。

5. 今後の課題

今回は、A 校に所属する児童の保護者および A 校に携わっている地域住民を対象に調査を行った。今後においては、小学校における学校支援ボランティアの活動を行う上での課題や取り組みについて考察していくために、調査対象を教職員にも広げるなどして、学校と保護者、地域の双方からみた課題を比較検討していきたいと考えている。また、学校支援ボランティアとしての参加状況や活動状況だけではなく、学校支援ボランティアの活動が児童にとってどのような教育効果をもたらすのかを調査していきたい。

参考文献

- ・『ボランティア活動に関する調査研究報告書』国立教育政策研究所社会教育実践研究センター（平成 19 年 4 月）
- ・『学校支援ボランティア活動の推進に関する調査研究報告書』国立教育政策研究所社会教育実践研究センター（平成 20 年 4 月）
- ・『学校支援ボランティア活動の推進方策に関する調査研究報告書』国立教育政策研究所社会教育実践研究センター（平成 21 年 3 月）
- ・『平成 22 年度 学校教育指導方針』茨城県教育委員会
- ・『平成 23 年度 学校教育指導方針』茨城県教育委員会